【アジアの絆プロジェクト】

報告書　東日本大震災一年　慰霊と復興を祈る慰問ツアー

「あとから来る者のために」

あとから来る者のために
田畑を耕し
種を用意しておくのだ
山を
川を
海を
きれいにしておくのだ
ああ
あとから来る者のために
苦労をし
我慢をし
みなそれぞれの力を傾けるのだ
あとからあとから続いてくる
あの可愛い者たちのために
みなそれぞれ自分にできる
なにかをしてゆくのだ

愛媛県砥部町在住だった
故坂村真民さんの詩

（宮城県南三陸町平成の森で開催された「鎮魂と希望のコンサート」で橋本岳人山によってこの詩が紹介された三月十一日　坂村真民記念館　はオープンした）

↑慰問ツアーの最後に訪れた大川小学校で

―　つながったアジアの絆。動きはじめた時　―

NPOユーラシアンクラブ・愛川サライ　代表大野遼

●2011年4月8日深夜、今思えば、ストロンチウムやセシウムが降り注ぐ被災地を原チャリで一人走っていた。南相馬市の海岸で目の前に広がる圧倒的な自然の威力に立ちすくみ呆然としていた。愛する家族も家も会社も飲み込んだ津波。海岸から幅4，5キロ、延長500㌔にわたって続く言葉にならない現実。それでも人は海と寄り添っていかねばならない。日々の暮らしに追われていても、向き合っていかなければいけないことがある。このままでいいのかと自問自答することが必要な時代だと思う。私にできることは何か。音楽を通してアジア知って欲しいと福島や宮城でも開催した「アジア・シルクロード音楽フェスティバル」。私が信じるアジアの音楽の可能性にかけることにした。

●6月22日、宮城県大河原町・えずこホールの水戸雅彦所長の紹介で南三陸町、東松島市を訪ね、慰問コンサートと炊き出しを行った。

たまたま訪れた南三陸町で、音楽による支援の絆がつながった。尺八界の最高峰で活躍する橋本岳人山は35年前、愛媛大学の学生の頃、海洋学（津波）の調査で南三陸町に通っていたのだ。

「高き住居は児孫に和楽　想え惨禍の大津波　此処より下に家を建てるな」

信じがたい高さの場所で見た津波警鐘の碑。「子孫に悲しい思いをさせないためにも、今、思い切って高台居住をみんなの力で実現したい」という岳人山。

私は、海に向き合う鎮魂と希望の曲「2011年3月11日　絆」の作曲を岳人山にお願いした。そして実現した8月12日「第2回中津川弁才天愛川町音楽祭アジア・シルクロード音楽フェスティバル」での日本とアジアの最高のミュージシャンによる初演。曲に多くの聴衆が泣いた。

そして一年がかりで3月11日南三陸町で実現した「鎮魂と希望のコンサート」。長い急階段をゆっくりと歩み、平成の森アリーナの聴衆となった60人のお年寄りが穏やかな表情で聴いてくれた。そして笑顔で帰えられた。2時46分で止まったままの時が動きはじめたと信じたい。

●ユーラシアンクラブの仲間大谷龍雄、石巻日々新聞社の近江弘一、名古屋から石巻へ移住し支援を続ける後藤文吾・夫紀子夫妻、被災した記録を取り続ける写真家阿部美津夫各氏ら多くの方の協力で、南三陸町、石巻市、牡鹿半島の仮設団地11か所でのミニコンサートを実施。アフガニスタン再生を支援する江藤セデカさんからの激励、循環する自然との共生を訴えるアイヌ浦川治造さんによる鎮魂のカムイノミ、宮崎県門川町から裏方を支えた河野真一さんからお茶とシルクロードグリーンレーズン（株）からウィグル・トルファンの高級干しブドウの提供、体調を崩した被災者に喜ばれた真矢修弘氏の整体ケアや炊き出し等が行われた。

●この報告書は、アイヌ、アフガン、ネパール、ウィグル、モンゴル、フィリピンそしてユーラシアンクラブのミュージシャンやボランティアの仲間23人が多くの協力者・団体との絆で力を合わせて被災者に寄り添った記録です。ご寄附や支援をいただいた多くの方に感謝申し上げます。

2012年3月14日午前9時
新宿駅西口集合出発

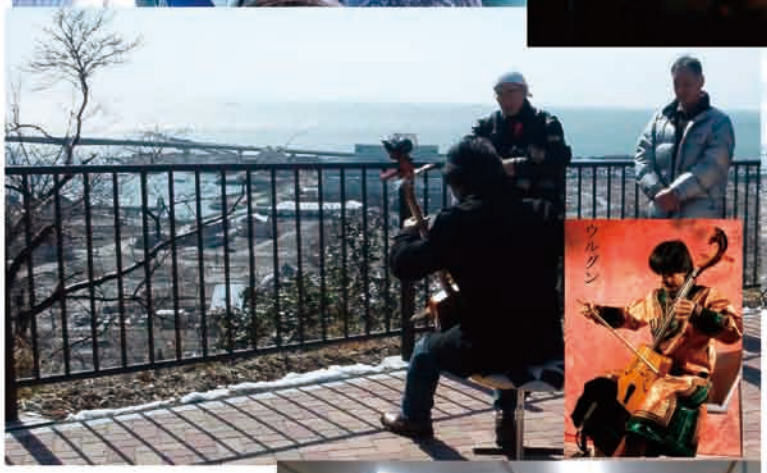
3月11日　南三陸町平成の森で、炊出し、傾聴、鎮魂と希望のコンサート

3月12日　石巻市内　日和神社で鎮魂演奏、石巻日日新聞社近江社長あいさつ、石巻市役所復興激励演奏、石巻市内5か所の仮設団地慰問、かめ七で商店街復興激励コンサート

3月13日　牡鹿半島・十八成浜老人憩いの家で炊き出しとコンサート、鮎川浜復興商店街、小渕浜仮設団地（民宿めぐろ）慰問コンサート、女川経由大川小学校で慰霊と浦川治造さんによるカムイノミ

3月14日未明　帰宅

南三陸町・平成の森で



石巻市内で

牡鹿半島・十八成浜で

ウィグルの音楽家　アブドセミ・アブロラフマンさんの話　私は「鎮魂」と「希望」の慰問コンサートに出演者として参加し石巻港を望む日和神社でウイグルの名曲「心の響き」を演奏しました。実は昨年５月21日、22日に、私はウイグル人の仲間と一度石巻にボランティアで訪ねていました。今回の大震災では石巻を含めたくさんの人が亡くなり、その人たちを鎮魂する為に、私達に何が出来るのでしょう？「演奏で支援活動をしょう」と考えました。今回のツアーに参加でき、直接被災者の方とお話をすることもできました。仮設住宅に住んでいる方々が集まり、お話をしたり、楽器を演奏したりと、談笑できるスペースをつくり、楽しく時間を過ごしました。多くの被災者から「音楽を聴いて、元気をもらった、ありがとう」など、音楽が被災者の心に響いた活動でした。ボランティア活動を続けている後藤文吾さんと現地で自ら被災された阿部美津夫さんらのご案内で、これまで訪ねることができなかった被災地、仮設住宅などを訪問できました。後藤さん、阿部さんと今回ツアーの多くの協力者に感謝の気持ちを伝えたいです。ありがとうございました。

傾聴を中心としたスタッフの活動記録　（編集　永田　真一）

3月10日（土）A.M9:00に新宿集合でスタートした「東日本大震災一年慰霊と復興を祈る慰問ツアー」
13日（火）までの活動記録を写真と傾聴中心にまとめました。

11日（日）震災一年目にあたる南三陸町宿泊所前の朝焼けです。
気温は2°C、少し雪の舞う天気でしたが暫くすると上がり悪天候が予想されていましたが、4日間天気には恵まれました。

南三陸町の被災状況です。

今回のツアーで最初に訪れたのは南三陸町でした。
着いたのが夜だったので、車内から見える通り沿いの風景しか見えませんでしたが、それだけでも、何もない風景に衝撃を受けました。
翌日明るくなってその全貌が見えたときは、何も言葉にできませんでした。
テレビで見ていてイメージはしていたものの、そんなものが吹き飛びテレビでは伝わらない、本当の現実を見せつけられた感じがしました。（金子洋久）

平成の森アリーナでカレーの炊き出し開始

案内配布
被災1年目の今日、慰霊祭が行われていたため不在の方も多かったのですが炊き出しの案内、整体師が来ていること、コンサートの内容説明をして被災後の状況などお話を伺いながら一軒一軒まわらせていただきました。
鎮魂の曲の説明を嬉しく聞いてくださる方色々な思いがあり話し込んでくれる方、目の不自由な方が玄関まで出てきてお話いただいたときは、申し訳無さ以上に胸がいっぱいになりました。（永田真一）

コンサート開始　大野代表挨拶

14:00定刻にスタート
被災後これまでのユーラシアンクラブ他協力団体の活動経過を報告、地元協力者へのお礼の後、メンバー紹介。
「2時46分」のまま止まった時計の前で、「一緒に時を前に進めましょう」と呼びかけました。

コンサート第一部 「鎮魂」

各国の民族音楽の楽器の音色に皆さん満足されていたように見受けられました。特にウルグンの馬頭琴による荒城の月で目頭を熱くされていた方（私も）が多く見受けられました。（矢部誠）

被災者の方に「皆さん頑張ってください」という言葉を頂くが、逆に「無理しないでという言葉を返したい」といわれ心が痛みました。（岳人山）

橋本岳人山より愛媛の詩人故坂村真民さんが被災者のために作った「あとから来る者のために」の紹介・朗読がありました。

アイヌの治造こと浦川さん挨拶の後14:46　1分間の黙祷

今回で3回目の被災地訪問だったが、現地の人の笑顔も見ることができた。去年4月に来た時には言葉をかけるのも大変だった。今回は何とか落ち着いているようで、俺もほっとした。皆が喜んでくれたのが一番うれしい。岳人山さんはじめメンバーも一生懸命頑張ったのも良かった。（浦川治造）

コンサート第二部「希望」

ミュージシャンの演奏のあと、全演奏者で橋本岳人山作曲「2011年3月11日　絆」を演奏、全員で「上を向いて歩こう」を合唱しました。

「一緒に時を前に進めましょう」

アイヌの治造さんから平成の森アリーナに木彫りのふくろうが贈呈されました。

「カムイノミ」
南三陸町の浜に出てアイヌに伝わる供養「カムイノミ」、「イチャルパ」を行ないました。
「カムイノミ」で亡くなった方達に来てもらい、「イチャルパ」でお土産を上げ帰ってもらう。
ひとかけらの食べ物がたくさんの食べ物になるという儀式で魚、果物、菓子などを小分けし最後に海に流し先祖の霊とともに見送ることができました。

石巻港の被災状況です。

海の向かいにガレキの山

津波と火災被害の小学校

市街地だった証の看板

海岸にある「日本製紙」の工場は避難訓練を含め津波対策をマニュアル化していたため、従業員1300人が無事だった。非番の人、関連会社の人120人が犠牲になったが、3月9日午後工場再開した。他は全くといってよいほど復旧は進んでおらず、ここに住宅を作ってはいけないと思うが港としての産業は継続すべきで民間企業の危機管理も参考に復興計画を早急に進めるべきかと思う。

日和神社での鎮魂演奏

不思議な絆 ： 今回の慰問ツアーは、人の絆でつながった。特に石巻日日新聞の近江弘一社長は、ユーラシアンクラブの仲間大谷龍雄の友人。近江社長から後藤文吾さんを紹介され、そして後藤さんを通して出会った被災者で写真家の阿部美津夫さんは、近江社長の親戚と分りました。↓

石巻日日新聞社
新聞発行ができなかった時期、壁新聞を社屋の前に張り出し市民に情報を伝えました。

石巻市役所4階通路でコンサート

水押団地　岳人山コンサート

時間が止まったままの被災地。
一刻も早く時計が動くよう微力ですが支援していきたい。
4プレートの上に住まいする以上、リスクを伴っている自覚と自然に対して何もできなかった教訓から反省したとき、原発の必要性に対しての回答が自ずと出ると思う。原発に依存していた贅沢を戒める時期にきている。
自然と共に生きるという先人の知恵をもっともっと活用すれば、真の人間の生き方が見つかるような気がします。（岳人山）

垂水団地

岳人山、パンチャラマコンサート

名振団地　アブドセミ、ウルグン　コンサート

コンサートのあと懇談の時間にして、ウイグルやモンゴルの生活や行事について被災者からの質問にミュージシャンが答えるという形式にして、お互いに親睦を深めることができました。最後に現地でお世話いただいた大和さんから、ご婦人たちが「マザーミサンガ」という名前で組み紐を製作して販売されているとうかがいました。男手のある世帯なら良いが、女性だけの世帯では収入源の確保が問題である。このミサンガの販売はそうした問題への解決策のひとつになっている。「我々の力は微力ですが小さなことから復興の第一歩にしたいと思います。」というのが皆さんの願いだ。私もなんとかして皆さんとの約束を果たし、「マザーミサンガ」の活動を広く知らしめていかなければと感じました。（井出晃憲）

呉服店「かめ七」コンサート

地盤沈下した鮎川浜

わかめ加工

被災現場を見たらやっぱり一年前の災害の時のことを想像しますね。被災した学校に行くと子供たちの可愛い性格、可愛い顔、そして災害の時の怖いイメージが想像されます。そして心がもっともっと痛くなり何も出来ない事で悩みます。時間を2011年3月の前に戻したいし、災害がなかったこの時は・・・でもこれは現実だからと思って、被災地の皆様のために自分の出来ることからやって行くのが大事なことと思い一生懸命馬頭琴の演奏などをやってきました。（ウルグン）

鮎川浜に行った日、やっと電気が通じ加工作業が始まった直後でとてもコンサートに行く時間はないと言われ、後藤夫人の提案でウルグンが作業している人たちの横で演奏しました。

小渕浜「民宿めぐろ」

小渕浜ではボランティアの方に向けた演奏もあり、岳人山の演奏に涙を流すボランティアの方々もいました。ここの駐車場には北海道から九州までのナンバーの車やバスがみられ、日本全国からボランティアが来ている事を実感し、また海外の方も多くいて人と人とのつながりを感じました。（金子洋久）

鮎川浜復興商店街では、ボランティア活動中の皆さん（高校生からご年配の方々）も演奏を聴きにこられ、60名近くの人たちで通路がいっぱいになり大盛況となりましたが商店街の営業に支障をきたしたのでは・・・行き当たりばったりの活動は、かえって逆効果になることも反省しなければなりません。商店街の寿司屋のおやじさんからお礼に寿司を食べていかないか？と声を掛けていただいたのですが時間もなく、お気持ちだけいただきました。（岳人山）

十八成浜「老人憩いの家」で炊き出し・コンサート

裏山の老夫婦は奥様が足が不自由で出歩けないと言われました。南三陸町の目の不自由な方のことがあったので、炊き出しのカレーを持ってきますと伝えたところ、訪問時には難しい顔をされていたのが笑顔も出て喜んでいただけました。心のケアが必要な方がまだまだいるような気がします。（永田真一）

女川　津波で倒壊したビル
↓

石巻市立大川小学校→

木彫りふくろうをお供えしました。カムイノミ・イチャルパを行い今回の慰霊と復興を祈る慰問ツアーを終えました。

【被災地での整体についての報告】

今回の慰問ツアーに私は3月10日～12日の3日間、被災者の心と体の整体によるケアを担当するために参加しました。その概略を報告します。　　真矢　修弘

★対象者の人数

＜3月11日（日）＞

南三陸町「平成の森」内「体験交流室」（和室）にて　8人

同上　仮設住宅内にて　1人

＜3月12日（月）＞

石巻市「三段走仮設住宅」内「集会室」にて　3人

以上計12人

世代別内訳：30代2人、50代60代各1人、70代5人、80代3人、男女比は半々でした。

★どんな症状・状態の人が来たか：

圧倒的に多かったのは体のあちこちが痛いというもので、膝が痛い、背中が痛い、ふくらはぎが痛い、等々でした。なかには舌の癌を切ってから出来た首筋の肉の塊が痛いという人（75歳・男性）、胃にポリープがあるという人（73歳・女性）、被災後に、腰から力が抜けてヘナヘナと床にくず折れることが2度あり、気仙沼市立病院まで行ったが原因がわからなかったという人（81歳・女性）、鬱状態の人（30代女性）もいました。

★成果は：

全般的に成果はあり、ほとんどの人がその場で楽になったと思われ、明るい顔で帰って行きましたが、慢性化したものや複雑微妙なものがその後どうなったかは、今でも気になります。（私個人の名において、その後の安否・体調等を問い合わせ、できればアドバイスをするなどのことも考えられるかもしれません。）・12日の仮設住宅の集会室では、ミニ・コンサート中で大勢の人が見ている空間で、しかも畳敷きでなく木の床の上で寝てもらうという悪条件のもとで整体を受けた人たちに、むしろ普通以上の成果があったことなどは、ふしぎといえばふしぎなことでした。・最初の人（81歳・男性）は、下肢全体の痛みで1日おきに注射を打ってもらっていると言っていましたが、すっかり元気になったとその場で飛び跳ねてみせ、腕立て伏せまでし、ついでに頭まで元気になったからと演奏後のパンチャラマさん（ネパールの笛の名手）に盛んに質問を発するありさまでした。

・別な女性（79歳）は、膝の痛みで両脚が曲がらず、座れないため壁に寄りかかっていたのですが、集会後の帰り道で歩いたらいつもとまるで違ったと、頼っていた杖もろくに使わずにわざわざ会場まで引き返してきて、私に大声で報告しました。その場で見ていた司会の後藤文吾さんや江藤セデカさんらが、どう受け止めたかはわかりませんが…。

★その他：

・今回の被災地支援の計画はメインであるコンサートを聴いてもらうことに加えて、その前に、おいしい物など食べてもらい、さらには体調のよくない人は整体も受けられる、という三位一体（？）的な構成に偶然にせよなったことは、大変よかったと思っています。・11日は朝9時半から夕方5時半まで（コンサートに顔を出した短い間を除いて）ほとんど休みなく、昼食もとれずに（ちなみに私は朝食をとらない習慣でもあり）、整体しつづけたため、非常に疲れました。その日が簡易宿泊所泊まりだったこともやや過酷でした。また、個々の人には、今後どうすればいいかを、時間の許す範囲で、できるだけお伝えし今回の活動を終えました。

以上

一周忌慰問ツアー実現を支えた人

宮崎県臼杵郡門川町の元文化会館館長の河野真一さんは、出発日の3月10日に先立つ3日前、7日から炊き出し用の食材準備のため応援に来てくれました。ツアーを通して、テントや車に寝起きして、300㌔の調理用具、音響機械等を積んだバンを運転して、黙々と荷物の積み下ろしを続け、慰問コンサートの音響ミキシングもフォロー。帰京後も2日間荷物整理をお手伝いいただきました。全体を調整するマネージャーをしていただいたのが、今回のツアー参加者最年少の菅野陽さんと事務局の井出晃憲さん。ミュージシャンを仙台まで送迎してくれたのが「カムイと生きる」映画監督の小松秀樹さん。参加者の送迎車が少ないと最後までご協力いただいた金子洋久さん。写真現像機械を持参し、記念写真を即座に被災者に渡していたのが成宮勇さん。伊東信行、斎藤桂子、佐藤秀子、後藤ひろみの4人は、炊出しの調理に腕を振るいました。矢部誠さんは浦川治造さんを支えて交流を和ませました。江藤セデカさんはアフガニスタンと被災者の苦労を重ねて心にしみる体験を話してくれました。また炊出し用のお米を寄贈し、佐々木マヤさんと調理・炊き出しに活躍してくれました。現地の後藤夫妻や被災者でもある阿部さんのコーディネートがなければ実現しなかった慰問ツアー。今後につながることを希望しています。

※　冒頭の詩「あとから来るもののために」を紹介するに至った経緯。

詩人坂村真民先生は、明治４２年１月６日熊本県に生まれ、戦前朝鮮で教職後、昭和２１年から愛媛県で高校の国語教師を勤め、６５歳で退職、以後詩作に専念、昭和３７年、月刊詩誌「詩国」を創刊。詩の愛好者によって建てられる真民詩碑は、日本全国４７都道府県に分布し、その数は現在，海外の３６基と合わせると約７３７基。平成１８年１２月１１日永眠（９７歳）。死去後、全国の真民先生のファンが全国に募金を募り、砥部町に坂村真民記念館を建てようと計画を立て、震災後に完成した。「強くあれ、優しくあれ、清らかであれ」と、苦しみ悲しむ人々の心にそっと寄り添い、安らぎと勇気を与えてきた真民先生のご意向を改めて被災された皆様にお伝えしたいとの関係者の思いで、地震後１年の３月１１日をオープンの日とし、前日のプレオープンセレモニーで演奏した岳人山が、被災地に赴くことから、「あとから来るもののために」の詩が、関係者の皆様より託された。（橋本岳人山）

東日本大地震発生から1年の記録

2011年3月11日	午後2時46分宮城県北部で震度７．巨大津波発生。	福島第1原発１～３号機緊急停止。	
12日		１号機水素爆発。（メルトダウン)	
14日		３号機水素爆発。	東京電力が計画停電開始
15日	死者行方不明者が1万人を超える	４号機で爆発。	20～30キロ圏屋内退避
4月8日		12日「事故レベル」チェルノブイリ並７	大野遼福島から宮城へ支援を模索
22日			20キロ圏警戒区域。20～30キロ圏計画的退避区域
5月12日		東電がメルトダウン認める	13日　中部電力浜岡原発停止
6月20日	復興基本法成立		
22日			南三陸町、東松島市で慰問コンサートと炊き出し
7月20日	松本龍復興相退陣表明		
8月12日			愛川町でチャリティコンサート、「絆」初演
26日	管直人首相退陣表明		
9月2日	野田佳彦内閣発足		
12日		原子力損害賠償支援機構設立	9月20日　活動調整で宮城、福島訪問
11月6日	被災地の仮設住宅がほぼ完成		10月21日　活動調整で宮城訪問
12月16日		第1原発「冷温停止」宣言	
28日	福島、宮城、岩手第1次避難所が閉鎖		
2011年1月1日	放射線物質補選対処特措法施行		1月10～14日　活動調整のため宮城訪問
2月10日	復興庁発足		
3月11日	震災から1年		3月10日～14日　南三陸町、石巻市、牡鹿半島へ

●死者1万5854人
南三陸町565人
石巻市3182人
行方不明者3155人
南三陸町280人
石巻市553人
避難者数34万3935人

●鉄道不通区間370キロ
道路不通区間60か所
被災漁港319港
岩手宮城福島3県の転出超過数4万人超
南三陸町人口9.4%

●岩手宮城福島3県のがれき約2253万ｔ
埋立等約142万ｔ
（岩手9%、宮城6%、福島5%）

●震災関連倒産656件
負債総額約9211億円
従業員1万757人
間接被害型608件（92.7%）

●ある若者アンケート結果：あなたは日本をどんな国にしたいか「省エネなど環境技術で世界をリードする国」（5割）

※　参考資料：帝国データバンク　日本経済新聞　総務省統計局　東京商工リサーチ　総合研究開発機構　日本政策投資銀行　復興庁　電通総研等発表・報道資料

【アジアの絆プロジェクト】東日本大震災一年　慰霊と復興を祈る慰問ツアー参加・協力者・団体

参加ミュージシャン：橋本岳人山（都山流尺八大師範）/パンチャラマ（ネパールの横笛バンスリの天才）/サラバンラマ（指太鼓タブラ演奏者）/アブドセミ・アブドラフマン（ウィグル古典音楽12ムカム研究者）/ウルグン（モンゴル馬頭琴界のホープ・ホーミー演奏家）

参加・協力者：後藤文吾/後藤夫紀子/高橋七男/高橋亮子/阿部美津夫/阿部信/遠藤信和/近江弘一/大谷龍雄/大野遼/樋口直正/河野真一/成宮勇/井出晃憲/矢部誠/真矢修弘/浦川治造/江藤セデカ/菅野陽/伊東信行/ノビリタ佐々木マヤ/小松秀樹/金子洋久/永田真一/斉藤桂子/佐藤秀子/後藤ひろみ/（順不同）

協力団体：NPO市民まちづくり風の会東北支部/日和神社/南三陸町レクイエムコンサート実行委員会/南三陸町平成の森石巻市/訪問先仮設団地自治会/呉服店かめ七/アイトピア商店街振興組合/石巻日日新聞社/愛知ボランティアセンター/民宿めぐろ/ＮＰＯユーラシアンクラブ・愛川サライ/カムイミンタラ/イーグル・アフガン復興協会/モンゴル・ブフ・クラブ/門川町婦人団体連絡協議会/かどがわ一本松来楽部/シルクロードグリーンレーズン(株)/（順不同）

寄付総額：519,000円（2011年6月～2012年3月、個人39人と募金）　支出総額：512,421円（活動調整経費を除く）

事務局：ＮＰＯユーラシアンクラブ・愛川サライ　電話03－5376－9343　Fax046－265－0167
本部〒103－0022東京都中央区日本橋室町1－11－5 支部〒243－0303神奈川県愛甲郡愛川町中津6314－1